



協和キリン株式会社

2026 年度第 1 四半期決算説明会

2026 年度 5 月 7 日

イベント概要

[イベント名] 2026 年度第 1 四半期決算説明会

[決算期] 2026 年度 第 1 四半期

[登壇者] 4 名

代表取締役会長	宮本 昌志 (以下、宮本)
代表取締役社長 CEO	アブドゥル・マリック (以下、マリック)
CMO	鳥居 義史 (以下、鳥居)
CFO	五十嵐 孝史 (以下、五十嵐)

登壇

司会：本日は、協和キリン株式会社、2026年12月期第1四半期決算オンライン説明会に参加いただき、ありがとうございます。

説明会の開始に先立ちまして、注意事項がございます。本日まで参加いただきました皆様のお名前および会社名につきましては、参加者リストとして弊社内で一定期間保管させていただきます。あらかじめご了承ください。

本日は、日英同時通訳がご利用可能です。Zoomの通訳機能に日本語、英語、オリジナル音声の3種類の設定がありますので、ご希望の言語をメニューから選択ください。なお、日本語または英語を選択され、後ほどの質疑応答でご発言される場合は、ご自身が選択した言語でご発言いただきますようお願いいたします。

また、本説明会の内容は、オンデマンド配信およびトランスクリプトとして弊社Webサイトで公開いたしますので、その点ご了承の上でご発言いただきますよう、併せてお願い申し上げます。

本日まで紹介する内容には将来に対する記述が含まれます。さまざまなリスクにより不確実性がございますので、ご了承ください。

本日のスピーカー、質疑応答は、代表取締役会長、宮本昌志、代表取締役社長 CEO、アブドゥル・マリック、Chief Medical Officer、鳥居義史、Chief Financial Officer、五十嵐孝史の4名でございます。

本日のオンライン会議は最大90分を予定しております。まず弊社から決算等をご説明した後、皆様からのご質問をお受けいたします。資料につきましては、弊社IR Webサイトからダウンロードをお願いします。

決算のご説明に先立ちまして、3月にCEOに就任したアブドゥル・マリックより、簡単に今後の経営方針をご説明させていただき、以降、決算概況をご説明いたします。

マリック*：皆様、こんにちは。重要な決算説明会にご参加いただき、ありがとうございます。

四つの小テーマについてご説明いたします。新たな経営体制における重点事項が一つ、二つ目が連結第1四半期の業績、三つ目がRocatinlimabの臨床試験中止を踏まえた業績予想の修正、四つ目は創薬力をさらに強化するための研究拠点に関する重要なお知らせでございます。

3月にCEOに就任して以降、私は経営力を強化するために新たなC-suite teamを編成いたしました。今回は、その中で定めた重点事項についてご紹介いたします。

2026年第1四半期ハイライト（エグゼクティブサマリー）

■ 今後の経営方針

■ 連結業績

- 売上収益1,185億円（前年同期比13%増収）、コア営業利益200億円（同78%増益）
- 年間計画に対しても計画線で推移

■ 業績予想のアップデート

- ロカチンリマブの臨床試験中止により、コア営業利益は上方修正
- 一方で、クロージングコストの発生等により、当期利益は変更なし
- Vision 2030 and Beyond:中長期構想で公表した財務KPIは変更しない

■ ビジネスピックアップ

- 創薬力の更なる強化を目指し、国内研究拠点の統合計画を発表

連結業績についてでございますが、売上収益は1,185億円、前年同期比13%増収、コア営業利益は200億円、前年同期比で78%増益となっております。年間計画に対しても計画線で推移しています。

業績予想のアップデートについてであります。Rocatinlimabの臨床試験中止により、コア営業利益は上方修正となります。一方におきまして、クロージングコストの発生等により、当期利益は変更なしとなっております。そして、Vision 2030 and Beyond、中長期の構想で公表した財務KPIは変更いたしません。達成するためにコミットしております。

最後に、ビジネスピックアップといたしまして、本日、創薬力のさらなる強化を目指し、国内研究拠点の統合計画を発表いたしております。

Vision 2030

協和キリンは、イノベーションへの情熱と多様な個性が輝くチームの力で、日本発のグローバル・スペシャリティファーマとして病氣と向き合う人々に笑顔をもたらす Life-changingな価値*の継続的な創出を実現します。

アンメット メディカルニーズを 満たす医薬品の提供

抗体技術の進化へ挑戦を続けることに加え、多様なモダリティを駆使し協和キリンの強みを生かした創薬により、有効な治療法のない病氣の治療に取り組んでいます。

患者さんを中心においた 医療ニーズへの対応

医薬品事業で培った疾患に関する知見と最先端の科学・技術の応用に努め、病氣と向き合う人々のニーズを基点にした新たな価値を共創することで社会の医療ニーズに応えていきます。

社会からの信頼獲得

常に信頼され、成長が期待される企業であり続けるため、世界トップクラスの製品品質とオペレーショナルエクセレンスを追求し続けます。

*病氣と向き合う人々の満たされていない医療ニーズを見出し、その課題を解決するための新たな薬やサービスを創造し、提供することで、患者さんが「生活が劇的に良くなった」と感じ笑顔になること

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

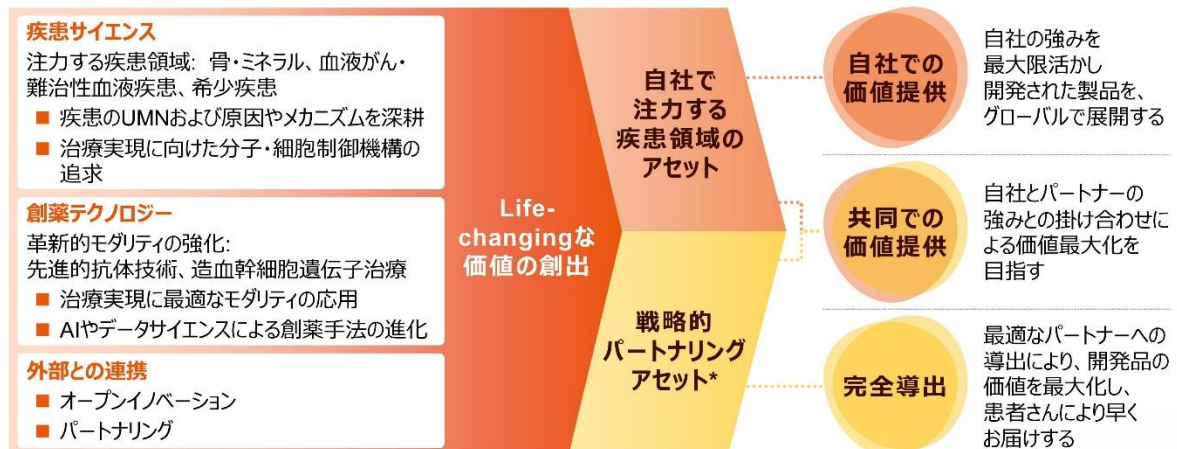
4

まず私どもが目指す Vision についてでございますが、これは変わらず、世界中の患者さんに笑顔をもたらす、真に Life-changing な価値を創出し、それを届けることにごさいます。

日本の歴史と DNA の強み、そして海外の強みを融合させた日本発のグローバルスペシャリティファーマとして、この Vision の実現を目指してまいります。

Life-changingな価値を創出するための戦略 - Story for Vision 2030

大きな環境変化がある中、ビジョン実現をより確かなものにするべく、Story for Vision 2030を策定。ビジョンの解像度を上げながら、戦略と課題をより有機的に結び付け、Life-changingな価値の創出に向けたCSV経営を実践していく



*注力する疾患領域以外のアセットを戦略的パートナーリングアセットとし、パートナーとの連携で価値最大化を実現する

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

5

このビジョンを実現するため、Story for Vision 2030 を公表し、注力する疾患領域を定めるとともに、どのようにして Life-changing な価値を創出していくかを明確にし、それを通じて CSV 経営を実践していくという方針を示しました。

協和キリンは強みのある疾患領域に注力し、成長を実現

領域×モダリティの双方にエキスパティーズをもつユニークなJ-GSPとして、グローバルに事業を展開

注力する 疾患領域

骨/ミネラル

**血液/
血液がん**

希少疾患

**戦略的提携
アセット/
その他**

強みがある モダリティ

抗体医薬
先進的抗体技術
ADC

遺伝子細胞治療
Engineered
HSC-GT
AIやデータサイエンスの活用

実績のある 商業化基盤

**疾患に関する
深い知見/経験**

**希少疾患の患者さん
を見出す知見**

**患者さん及び患者団体との密接な
エンゲージメントを継続**

**最適なパートナーへの導出により、
開発品の価値を最大化**

事業成長を支える

オペレーショナルエクセレンス

ガバナンス・執行体制の最適化

© Kyowa Kirin Co., Ltd. 6

こちらのスライドでは、Story for Vision 2030 についてより詳しくご説明し、当社の強みをどのように活かして将来の成長につなげるかをお示ししております。

まず、当社が深い知見を培ってきた疾患領域、すなわち骨/ミネラル、血液がん・難治性血液疾患、血液腫瘍、希少疾患に注力してまいります。これらの領域では、患者さん一人一人のニーズが非常に深く、医療現場との密接な連携も重要です。

モダリティという観点では、次世代抗体技術、抗体薬物複合体、遺伝子、細胞治療など、当社が強みを培ってきた領域、そして疾患の治療、管理の進歩につながる可能性のある領域に注力していきます。特定の疾患領域における知見と先進モダリティに関する科学的理解を組み合わせることで、協和キリンを真に独自性の高いグローバルスペシャリティファーマとして確立できると考えております。

さらに、Crysvita や Poteligeo に代表されるように、グローバルで実績のある商業化の基盤を構築してまいりました。これは世界中においてであります。最近では Libmeldy/Lenmeldy も同じことを行っております。患者さんを特定することから、疾患啓発、患者さんの支援、アクセス、そして

医療従事者の深いエンゲージメント、安定供給に至るまで、一気通貫で価値を届ける力が成長を支えています。

これらを土台としまして、AI やデータサイエンスを活用したオペレーショナルエクセレンスの高度化を進めてまいります。限られた経営資源を最も価値創出につながる領域に集中させております。

協和キリンは強みのある領域にフォーカスし続けることで、継続的な成長と患者さんにとって本当に意味のある Life-changing な価値の創出を実現してまいります。

新しい執行体制 (C-suite executive team) における優先事項

Kyowa KIRIN

Life-changingな価値の創出と提供と「Vision 2030 and beyond : 中長期構想」の財務目標を達成に向け、成長の軸を以下に明確化

1 既存主力製品の価値最大化

- CrysvidaとPoteligeoの成長継続と、ライフサイクルマネジメント施策による価値最大化

2 規律に基づいた戦略投資の積極的な検討

- フォーカス領域において戦略投資 (製品導入、企業買収等) を実行、更なる成長を狙う

3 次世代成長基盤の確立 (注力領域への集中)

- 注力する疾患領域のパイプラインの開発成功・上市
(KOMZIFTIのAML*1次治療への適応拡大、KK8123, KK2845, OTL-203など)

4 成長を支えるオペレーショナルエクセレンスの追求

- AI/DXによるオペレーションモデルの転換
- プロセスの最適化とリソースの集中を進め、機動力を高める

Life-changingな
価値の創出と提供

中長期財務目標
(2030年前半)

- ROE10%台前半
- コア営業利益率30%

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

*急性骨髄性白血病のうちメチン依存性のものが対象

7

それでは、新しい C-suite、執行体制における優先事項を説明したいと思います。

3月の Rocatinlimab の臨床試験中止に関する説明会の際にお示ししました、Vision 2030 and Beyond、中長期の構想で掲げる野心的な財務も目標を達成するために四つの重点領域がございます。

まず一つ目、グローバル製品である Crysvida、Poteligeo、Libmeldy/Lenmeldy などの成長を最大化することによって、この製品が対象とする患者さんの価値を、Life-changing な価値を届けるための取り組みを続けています。

二つ目は、注力疾患領域において、強い財務規律のもとで戦略的投資を積極に進めてまいります。Rocatinlimab の臨床試験のプログラム終了を踏まえまして、インライセンシング、M&A を含め、パイプラインを強化していきます。

三つ目は、注力疾患領域における次世代の成長基盤を確立することです。具体的には KOMZIFTI のファーストラインの第3相、そして 8123、そして XLH の次世代治療ですけれども、それから 2845、そして ADC、OTL-203 といったようなものがございます。MPS I、ハーラー病に対する治療薬です。

そして4番目は、あらゆるレベルでオペレーショナルエクセレンスを徹底することであります。体系的に利益率、ROE、そして機動性を向上させていきます。これは AI や DX を活用しながら、プロセスや働き方を見直すことによって実行してまいります。



外部環境は急速に変化しています。地政学リスク、そして規制政策の変化などです。こうした環境変化にしっかりと対応していくためには、社外のステークホルダーとの対話とエンゲージメントがますます重要になっていきます。

われわれの経営の原点は常に患者さんです。病气と向き合う人々の声に真摯に耳を傾け、アンメット・メディカル・ニーズの解決に取り組んでまいります。

また同時に、規制当局そして政策関係者などの対話を通じて、当社の戦略や財務規律についての理解を深め、そのフィードバックを経営に活かしていくということでもあります。

そして、投資家、株主の皆様も非常に重要なステークホルダーでありまして、こうした社外ステークホルダーとのエンゲージメントは、CEOとして、私自身が重要な役割を担う領域だと考えてお

ります。これからもしっかりと強化し、皆様のフィードバックをもとに取り組んでまいりたいと存じます。

また、本日同席しております新しい CFO、五十嵐も資本市場との対話を中心に積極的に関与してまいります。

それでは、次のスライドから第 1 四半期の財務レビューということで、五十嵐にバトンタッチしたいと思います。

FY26 Q1業績サマリー

Q1は増収増益で年間計画に対しても計画線

(単位は億円、単位未満四捨五入)

2025年 Q1実績	2026年 Q1実績	増減	2026年 修正予想	進捗率
売上収益 <small>[海外売上比率]</small>	1,047 <small>[73%]</small>	+137 <small>(+13%)</small>	5,200→ 5,200 <small>[77%]</small>	23%
売上総利益 <small>[売上総利益率]</small>	801 <small>[77%]</small>	+81 <small>(+10%)</small>	3,910→ 3,880 <small>[75%]</small>	23%
販売費及び一般管理費*1 <small>[販管費率]</small>	404 <small>[39%]</small>	+7 <small>(+2%)</small>	1,690→ 1,630 <small>[31%]</small>	25%
研究開発費 <small>[研究開発費率]</small>	286 <small>[27%]</small>	-14 <small>(-5%)</small>	1,220→ 950 <small>[18%]</small>	29%
コア営業利益 *2 <small>[コア営業利益率]</small>	112 <small>[11%]</small>	+88 <small>(+78%)</small>	1,000→ 1,300 <small>[25%]</small>	15%
当期利益/四半期利益	62	+59 <small>(+95%)</small>	750→ 750	16%

*1 無形資産償却費 (販売権償却費) を除く
 *2 コア営業利益: 売上総利益 - 販売費及び一般管理費 (無形資産償却費を除く) - 研究開発費 - 当社が判断する非経常的な損益

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

為替情報
 ■ 2025年Q1実績 154円/米ドル
 ■ 2026年Q1実績 155円/米ドル
 ■ 2026年修正予想 150円/米ドル
 * 2026年5月7日に発表した業績予想の修正において、為替の前提に変更はありません。

五十嵐：3月より CFO に就任しました、五十嵐です。

それでは、2026 年第 1 四半期の業績サマリーからご説明します。

Q1 実績ですが、全体として売上収益は増収、コア営業利益、四半期利益ともに増益となりました。

売上収益は、グローバル戦略品の伸長に加え、Rocatinlimab に関する技術収入の一括認識が寄与し、13%の増収となりました。

コア営業利益については、売上収益の増加に加え、研究開発費が減少し、78%の大幅な増益となっています。

四半期利益については、減損損失を計上したものの、コア営業利益の大幅な増加により 59 億円の増益となりました。

また、先ほどお伝えしたとおり、通期の業績予想を修正しております。Rocatinlimab の臨床試験中止により、コア営業利益については上方修正していますが、クローリングコストの発生等を踏まえ、当期利益の予想は据え置いています。

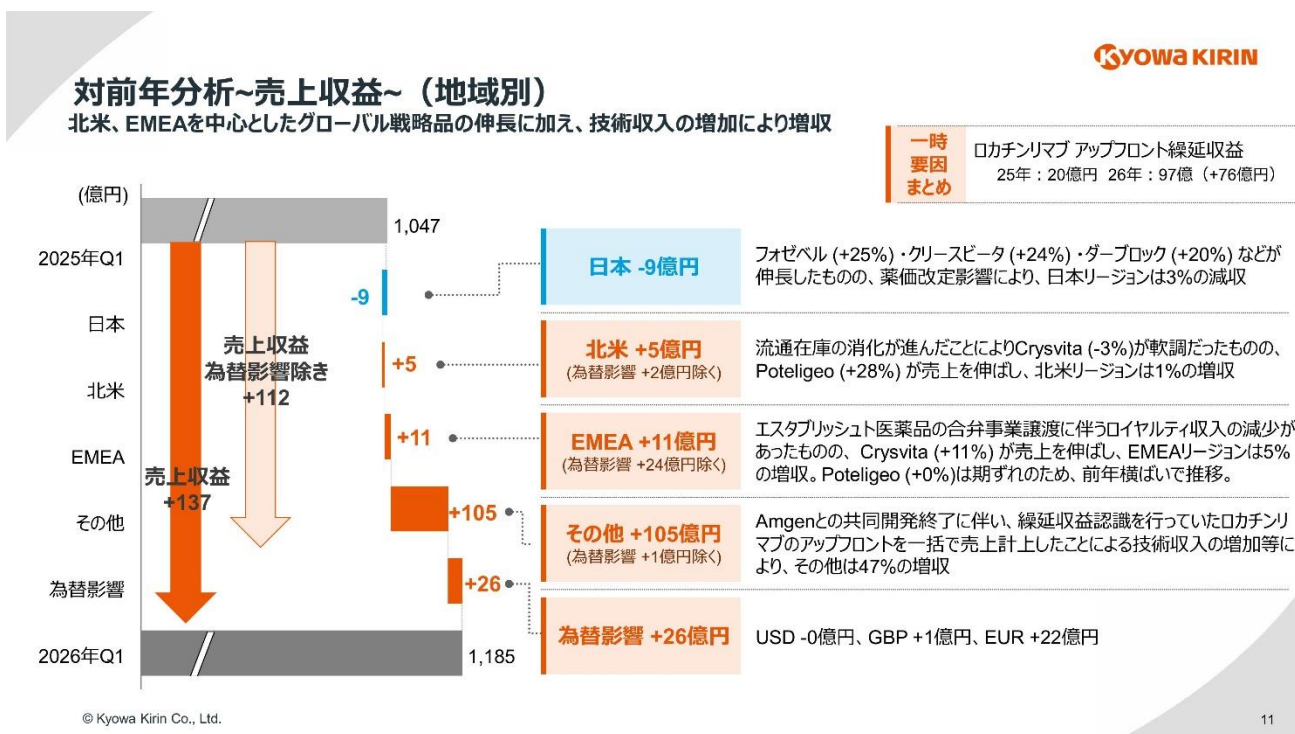
後のスライドで修正内容の詳細を説明しますが、このページでは修正予想に対する進捗率について簡単に説明いたします。

売上収益および売上総利益はともに 23%の進捗率となっており、いずれも例年どおり、年度後半に向けて売上が伸長していく想定の中で計画線で推移しています。

販管費についても、通期計画に対しておおむね計画線での進捗です。

研究開発費については 29%の進捗となっていますが、Rocatinlimab の臨床試験中止に伴い、Q2 以降減少しますので、おおむね計画線で推移しています。

これらの結果、コア営業利益の進捗率は 15%、四半期利益は 16%となっています。



こちらは、リージョン別の売上収益、対前年分析となります。為替影響を除いた実質の増減で表示しています。

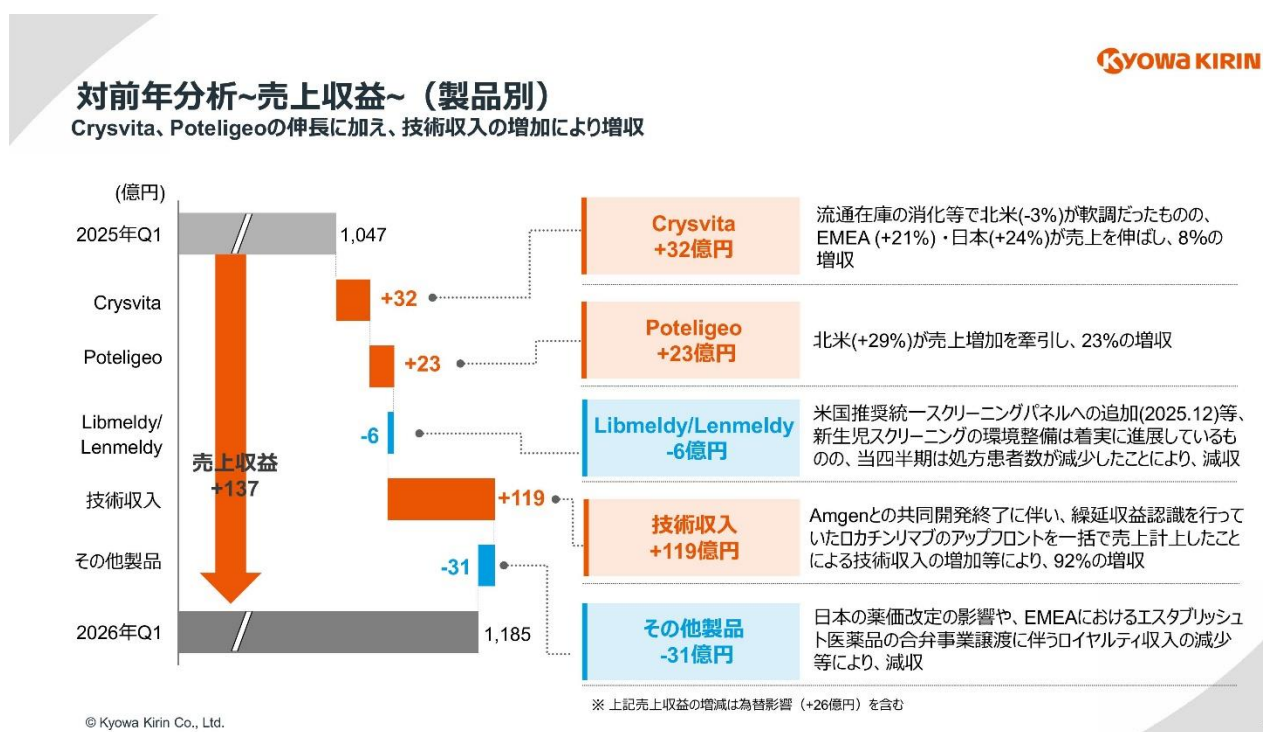
日本については、フォゼベル、クリスビータ、ダーブロックなど主力品が伸長したものの、薬価改定の影響により、全体ではマイナス 9 億円、3%の減収となりました。

北米については、為替影響を除いた実質ベースで5億円の増収となりました。Crysvitaは流通在庫の影響により前年割れとなりましたが、Poteligeoが28%と力強く成長し、北米全体では1%の増収となっています。

EMEAについては、エスタブリッシュト医薬品事業の合併譲渡に伴うロイヤルティ収入の減少があったものの、Crysvitaが11%と堅調に推移し、実質ベースでプラス11億円、5%の増収となりました。

その他については、スライド右上にも1次要因として記載しましたが、Amgenとの共同開発終了に伴い、Rocatinlimabのアップフロント収益を一括計上したことによる技術収入の増加等により、105億円、47%の大幅な増収となりました。

売上収益に係る為替影響は26億円でした。



こちらは、今回から新たに追加しました、製品別の売上収益の対前年分析となります。こちらは、為替影響込みの様式になっています。

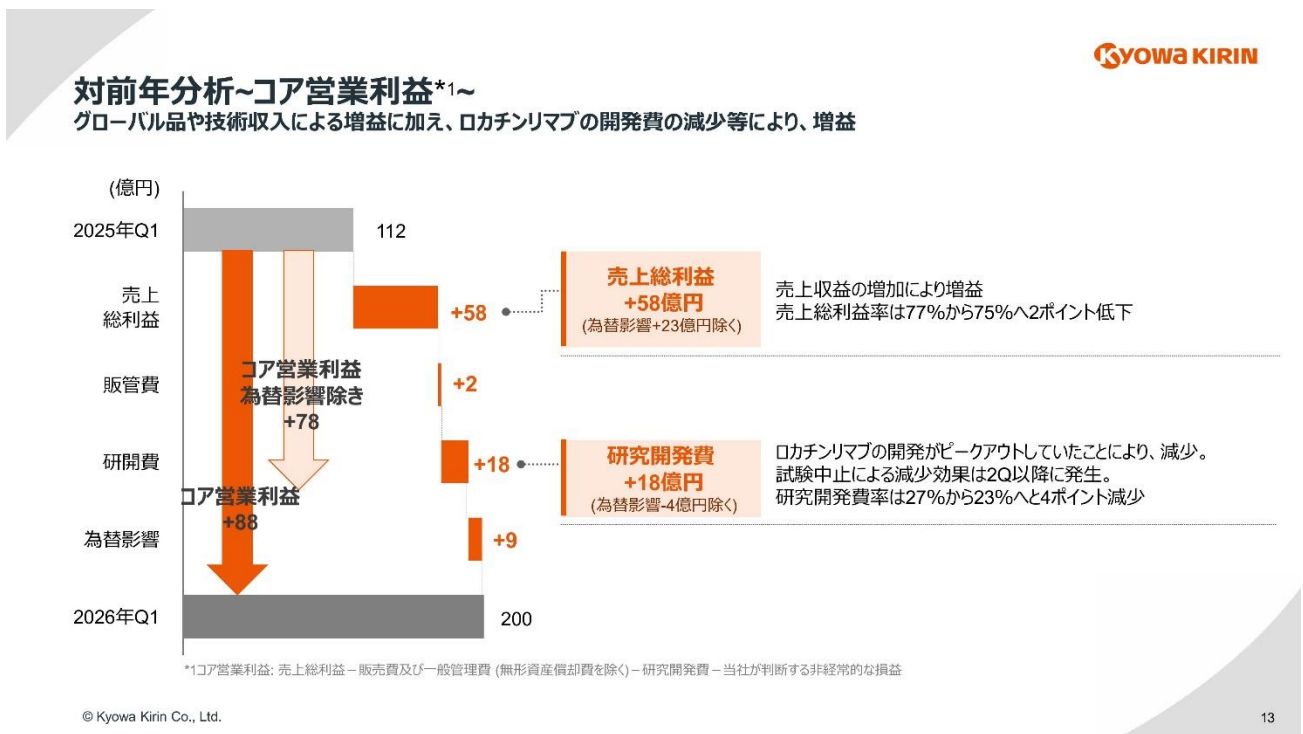
Crysvitaは、前年同期比でプラス32億円、8%の増収となりました。北米では前ページでお話した要因により売上は前年を下回りましたが、需要そのものは引き続き力強く推移しており、構造的な成長トレンドに変わりはありません。日本およびEMEAでは、引き続き堅調に成長しています。

Poteligeo も、前年同期比でプラス 23 億円、率でも 23%の増収となりました。北米においては、営業体制の強化やデータ、AI を活用したプロモーションが奏功し、29%と引き続き高い成長を維持しています。一方、EMEA では出荷タイミングの影響により前年並みにとどまりましたが、デマンド自体は底堅く推移しています。

Libmeldy/Lenmeldy については、前年同期比で 6 億円の減収となりました。米国では売上はほぼ横ばいでしたが、EMEA において売上計上のタイミングの影響を受けたことが要因です。なお、通期では計画どおりの進捗を見込んでいます。

技術収入は、前年同期比で 119 億円の増収となりました。これは主に、前ページで説明したアップフロント収益の一括計上によるものです。加えて、ファセンラのロイヤルティ収入も引き続き増加しています。

その他製品については、31 億円の減収となりました。日本における薬価改定の影響や、EMEA におけるエスタブリッシュト医薬品事業の合併譲渡に伴うロイヤルティ収入の減少などが主な要因となっています。



こちらは、コア営業利益の対前年分析となります。こちらでも為替影響を除いた実質の増減での表示に変更しています。

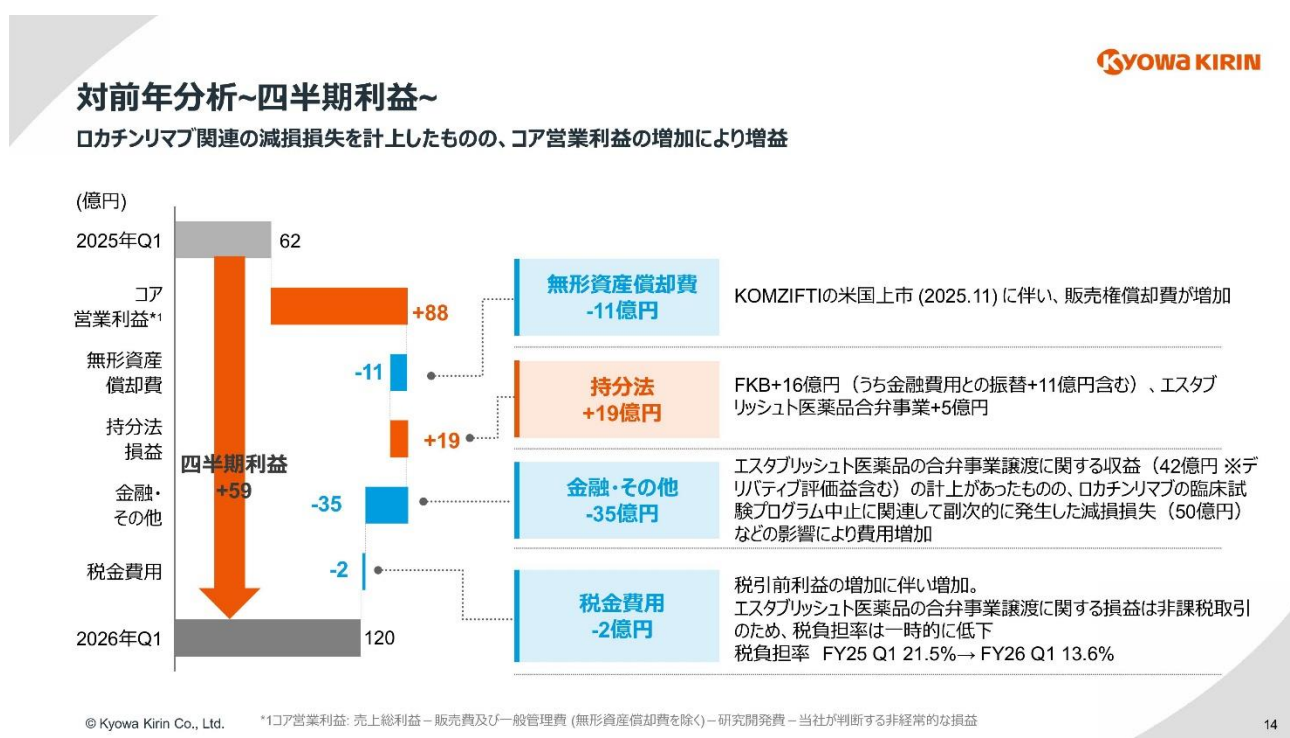
売上総利益は、売上収益の増加を主因として、為替影響を除いた実質ベースで 58 億円の増益となりました。売上総利益率は 77%から 75%へ 2 ポイント低下していますが、昨年は一時的に Q1 の率が高く、昨年通期では 74%でした。

販管費は、ほぼ前年並みで推移しました。

研究開発費は、Rocatinlimab の開発費が既にピークアウトしていることなどから 18 億円の減少となり、研究開発比率も 27%から 23%へ減少しています。

なお、前述したとおり、Rocatinlimab の臨床試験中止に伴う研究開発費の減少効果は Q2 以降に発生します。

これらの結果、コア営業利益 88 億円、78%の増益となりました。



コア営業利益以下の部分をご紹介します。なお、このスライドは、従来どおり為替影響込みの増減になります。

まず無形資産償却費では、昨年 11 月の米国 KOMZIFTI の上市に伴い、販売権償却費が 11 億円増加しています。

持分法損益では、FKB 事業で 16 億円、エスタブリッシュト医薬品合併事業で 5 億円の増加となり、全体で 19 億円の増加となっています。

金融・その他では、エスタブリッシュト医薬品事業の合併譲渡に関する収益 42 億円の計上があったものの、Rocatinlimab の臨床試験中止に関連して発生した減損損失 50 億円を計上しています。

これらの結果、四半期利益は 59 億円の増益となりました。



FY26 業績予想アップデートサマリー

年間業績予想はコア営業利益を上方修正。当期利益は修正せず、対前年増益を目指す。

(単位は億円、単位未満四捨五入)

売上収益

[海外売上比率]

2025年
実績

4,968

[74%]

2026年 修正予想

5,200→

5,200

[77%]

増減

+232

(+5%)

売上総利益

[売上総利益率]

3,689

[74%]

3,910→

3,880

[75%]

+191

(+5%)

販売費及び一般管理費*1

[販管費率]

1,579

[32%]

1,690→

1,630

[31%]

+51

(+3%)

研究開発費

[研究開発費率]

1,012

[20%]

1,220→

950

[18%]

-62

(-6%)

コア営業利益*2

[コア営業利益率]

1,098

[22%]

1,000→

1,300

[25%]

+202

(+18%)

当期利益

670

750→

750

+80

(+12%)

ROE

(3年平均)

7.7%

(8.3%)

8.2%

(7.7%)

DOE

3.8%

4.1%

為替情報

■ 2025年実績 150円/米ドル

■ 2026年修正予想 150円/米ドル

* 2026年5月7日に発表した業績予想の修正において、為替の前提に変更はありません。

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

*1 無形資産償却費 (販売権償却費) を除く

*2 コア営業利益: 売上総利益 - 販売費及び一般管理費 (無形資産償却費を除く) - 研究開発費 - 当社が判断する非経常的な損益

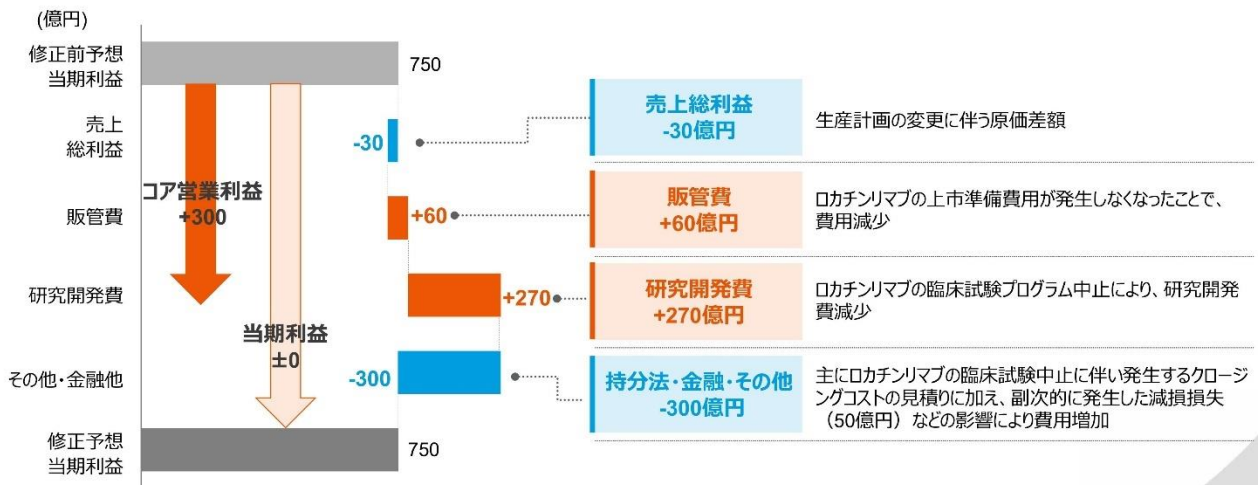
15

2025 年度実績と修正後の 2026 年度業績予想を比較したものになります。

先ほどご説明したとおり、コア営業利益を上方修正し、対前年比較ではコア営業利益、当期利益ともに増益を目指す計画となっております。

業績予想アップデート

ロカチンリマブの臨床試験中止による費用減でコア営業利益が増加するものの、クロージングコスト等の計上により当期利益は据え置き



© Kyowa Kirin Co., Ltd.

16

このスライドでは、業績予想アップデートの内容について説明させていただきます。

コア営業利益でプラス 300 億円上方修正しております。これは 3 月の説明会にて、200 から 300 億円の影響があると説明したものに該当します。

こちらの主な要因として、販管費は、Rocatinlimab の上市準備費用が発生しなくなったことで費用減少となり、プラス 60 億円の影響、研究開発費では、同様にプログラム中止により減少、プラス 270 億円の影響となります。

その他・金融他では、Rocatinlimab の中止に伴い発生するクロージングコストの現時点での見積もりに加え、副次的に発生した減損損失の 50 億円などの影響により、マイナス 300 億円となることを見込んでいます。

これらの結果、コア営業利益はプラス 300 億円となったものの、当期利益は修正前予想から据え置き 750 億円を予想しています。

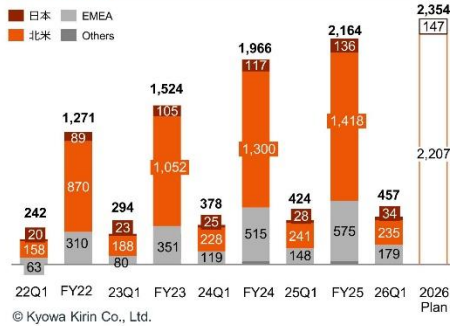
2026年の主要アクション

- **北米:**
患者さんの特定、医療関係者向け教育、患者サポートサービスの進化を支援するための人的資源およびオペレーションへの投資を継続
- **EMEA:**
AI活用を含む患者さんの特定強化、小児領域におけるガイドラインに基づく使用の浸透強化および成人患者さんへの浸透
- **日本:**
2025年10月に発足した骨領域専任室を中心としたプロモーション活動および疾患啓発活動の強化により、成人患者さんへの浸透を推進する

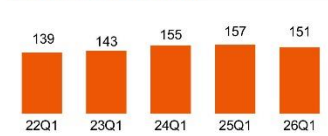
2026年Q1のトピックス

- **北米: 前同比 円貨ベース-3%、現地通貨ベース-3%**
季節性要因（在庫消化）によりQ1の売上は軟調に見えるものの、強化された患者支援プログラムに支えられ、需要の前年比成長は引き続き強く推移
- **EMEA: 前同比 円貨ベース+21%、現地通貨ベース+11%**
堅調な需要に加え、EUにおけるXLH治療ガイドラインに基づく成人患者の増加が成長を牽引し、治療患者数の拡大に寄与
- **日本: 前同比 +24%**
専任MRによるプロモーション強化および疾患認知向上の取り組みが奏功し、新規患者の安定的な獲得とプレフィルドシリンジの浸透が加速

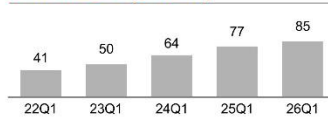
売上収益 (億円)



北米 売上収益 (百万米ドル)



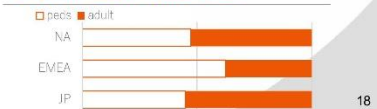
EMEA 売上収益 (百万ポンド)



北米 デマンドのトレンド



Crysvita 処方XLH患者構成比



マリック*：ありがとうございます。

それでは、ここからコマーシャルアップデートについてご説明いたします。

まず、Crysvita からです。

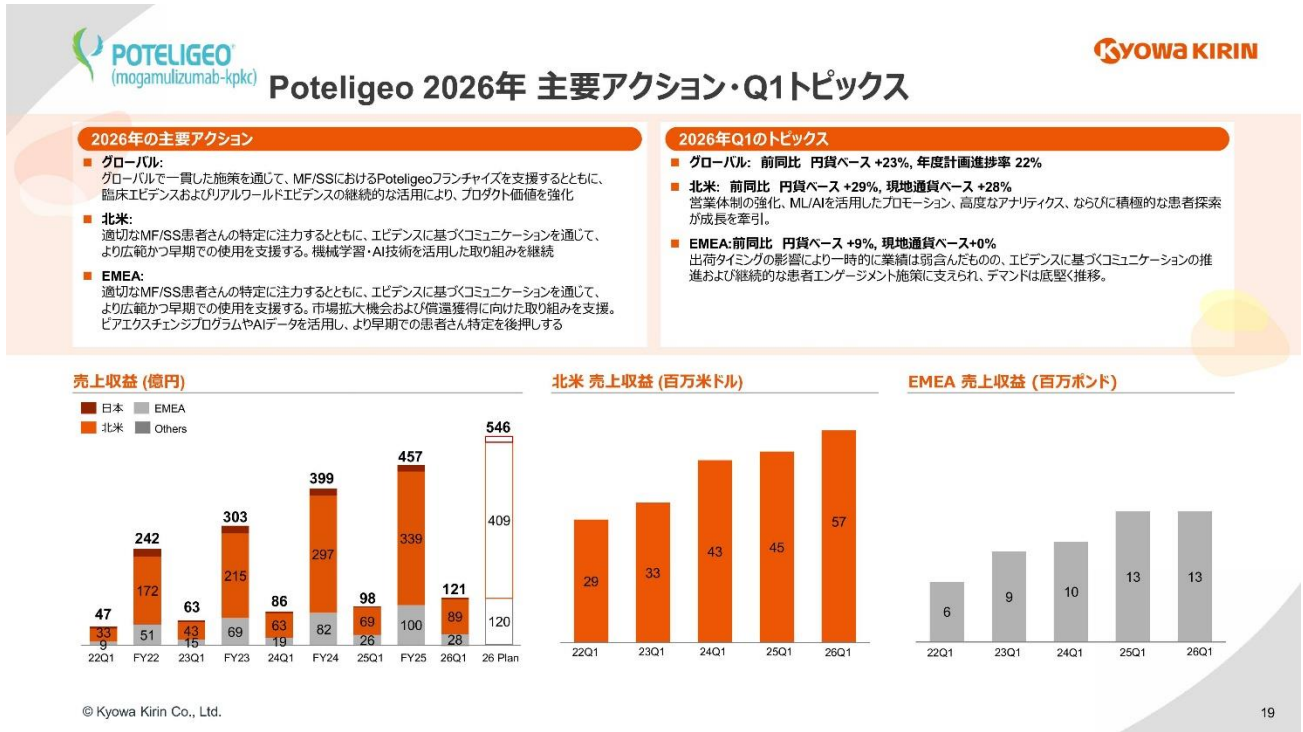
第1四半期の売上収益は、グローバル全体で前年同期比8%の増収となりました。北米については、当四半期は前年同期比、日本円ベースで3%、現地通貨ベースで3%の減収となりました。こちらは主に、2025年12月にスペシャリティ薬局が購入した過剰在庫を消化していることによるものです。

重要なのは、患者同定、患者開始フォーム、患者償還といった主要な先行指標が引き続き堅調であり、実需そのものは引き続き強いということでもあります。

下の北米デマンドのトレンドのチャートです。棒グラフで、協和キリンからスペシャリティファーマの四半期ごとの売上を示しております。こちらは購入パターンによって変化がございます。折れ線は卸からヘルスケアプロバイダへの出荷を示しております。こちらが真の需要を示しております。全体として成長基調を維持しております、通期計画どおりに進捗しております。こちらをベースに、われわれは通期どおりの計画を維持しております。

EMEA では引き続き堅調な成長を維持しております。

Crysvita 処方を含む XLH 治療に関する公的なガイドラインが示されたことも追い風となり、疾患啓発活動およびコマース活動が進展しています。これにより、治療患者数は成人患者さんを中心に着実に増加しております。日本においても、専任の骨代謝領域担当者による体制が奏功しております。新規患者の安定的な獲得に貢献しております。



Poteligeo です。

第1四半期の売上収益は、グローバル全体で前年同期比、円貨ベースで23%の増収となり、引き続き力強い成長を続けています。北米における現地通貨ベースの売上はプラス28%と、力強い成長となりました。これは、機械学習およびAIを活用した患者同定の高度化の効果や、営業体制の強化の影響が引き続き表されていることによるものです。

EMEAにおいては、現地通貨ベースでプラス0%と、出荷タイミングの影響により一時的に業績は弱含んだものの、エビデンスに基づくコミュニケーションの進捗および継続的な患者エンゲージメント施策に支えられ、デマンド自体は底堅く推移しております。

2026年の主要アクション

- 有効性・安全性プロファイルおよび使いやすさといった特長を背景に、再発難治 (R/R) のNPM1変異陽性AMLにおいて競争力のある治療選択肢としてのポジションを確立、さらなる市場浸透の拡大を目指す

2026年Q1のトピックス

- 発売初期段階として好調なスタートを確認
- 差別化された製品プロファイルを背景に、再発・難治性NPM1変異AMLにおいて処方医・患者さん・薬剤師からの強い関心を確認
- 民間保険会社の80%超がKOMZIFTIを給付対象としている

※ KOMZIFTIの売上収益はKura Oncology社の決算説明会 (5月12日) 後に開示予定

KOMZIFTI

Product P/L Image (単位: 億円)

項目	2025通期	2026 Q1
Net Profit / Net Loss before tax	(82)	(15)

・ Net Profit / Net Loss before tax の50%を協和キリンのP/Lに計上

Kyowa Kirin P/L Image (単位: 億円)

項目	2025通期	2026 Q1
売上収益	—	—
販売費及び一般管理費	(41)	(7)
コア営業利益	(41)	(7)
無形資産償却費	(7)	(11)
税引前利益	(48)	(18)

各種進捗

 Ziftomenib (開発) KOMZIFTI (開発以外)

- National Comprehensive Cancer Network® (NCCN) 急性骨髄性白血病ガイドラインに追加 Press release Nov 26, 2025
- 2025 ASH Annual MeetingにてKOMET-007 P1b試験 ven/aza併用コホートの有効性・安全性の結果を発表 Press release Dec 9, 2025
- NPM1変異を有する再発難治AMLを対象とした日本P2試験を開始 Press release Apr 24, 2026

今後の予定

- KOMET-007 P1b試験: 1次治療 7+3 併用治療データ First Half of 2026
- KOMET-007 P1試験: 再発難治NPM1変異AMLのven/aza併用試験結果 論文発表 First Half of 2026
- KOMET-008 P1試験: NPM1/FLT3共変異AMLを対象としたGilteritinib併用データ Second Half of 2026

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

20

次が KOMZIFTI (ziftomenib) です。

2026年の目標は、再発難治性 NPM1 変異 AML に対する競争力のある治療選択肢として、米国において KOMZIFTI を確立し、さらなる市場浸透を図ることです。

安全性プロファイルと使いやすさに関する医療従事者からのフィードバックは引き続き非常に良好であり、その結果、採用状況は当初の予想を上回り続けております。また、KOMZIFTI は現在民間医療保険プランの 80%以上でカバーされており、一部の医療保険プランではカバレッジの拡充も見られております。

再発難治性 AML における KOMZIFTI の継続的な市場浸透を図るべく、Kura Oncology と連携しながら、1次治療での使用を目的としたフェーズ3のプログラムを推進してまいります。KOMZIFTI の真価が示されるのは、この1次治療においてであると考えています。

スライドの下段には各種の進捗状況をまとめています。特筆すべき点として、先月、再発難治性 NPM1 変異 AML を対象とした、日本における承認申請を目的としたフェーズ2の試験を開始したことであります。

スライドの最下部には、各種試験の結果発表など、今後のマイルストーンを示しております。フェーズ1の KOMET-007 試験のデータ、こちらは1次治療における7+3の化学療法との併用、および再発難治症例におけるven/azaとの併用を評価したものでございますが、こちらは今年の上半期


に発表される予定であります。NPM1/FLT3 共変異 AML における Gilteritinib との併用を評価する KOMET-008 試験のデータに関しては、年度後半に発表される見込みでございます。

以上でコマースシャルのアップデートを終わります。

Kyowa KIRIN


「革新的なLife-changingな価値の創出」に向けてさらに一步踏み出す

Vision 2030 and Beyond -中期構想- より




革新的な Life-changingな価値の創出

- 先進的抗体技術と造血幹細胞遺伝子治療の強みを活かし、研究開発を加速する
- Ziftomenib、KHK4951など後期開発パイプラインを確実に進展させる
- 戦略的投資による新たなパイプライン、収益機会の獲得を狙う




患者さんへの Life-changingな価値の提供

- 実績のあるグローバルにおけるコマースシャル基盤をさらに強化していく
- 患者さん、及び患者団体との密接なエンゲージメントを継続
- CrysvidaおよびPoteligeoの成長を継続
- KOMZIFTIの上市および市場浸透を推進



Super Teamによる オペレーショナルエクセレンスの追求

- 戦略を力強く実行するケイパビリティを備えたSuper Teamへ更なる進化
- AI/DXによるオペレーションモデルの転換
- プロセスのシンプル化とリソースの集中を進め、アジャイルに動き続ける

 **国内研究拠点を統合し、新拠点の横浜への移転**

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

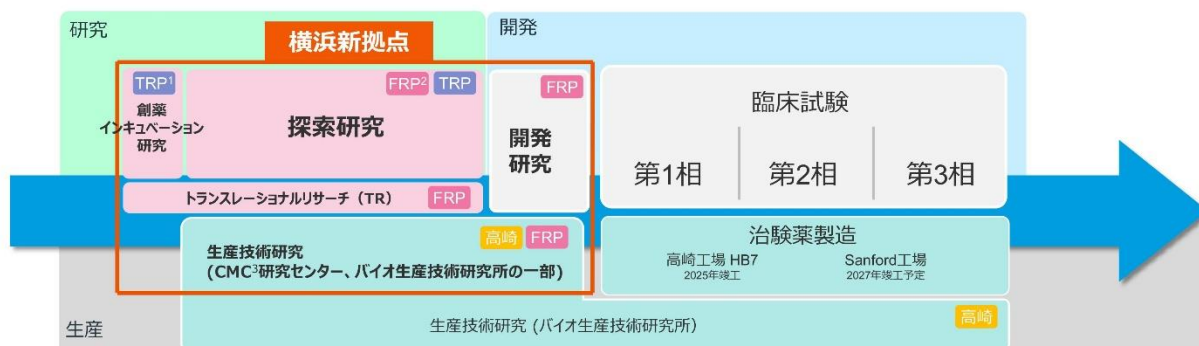
22

それでは、ビジネスアップデートに移ります。

Vision 2030 and Beyond、今年2月に発表いたしました三つの柱をお示ししております。革新的なLife-changingな価値の創出、患者さんへのLife-changingな価値の提供、そしてSuper Teamによるオペレーショナルエクセレンスの追求です。

今回は、革新的なLife-changingな価値の創出に沿った弊社の研究開発を強化するための計画として、当社の国内研究拠点の統合、新たな研究拠点の横浜への移転をお知らせいたします。

創薬力の更なる強化 — 国内研究拠点を統合して新研究拠点を横浜に移転



- 最新の創薬技術に対応するために、協和キリンの創薬プロセスを進化させる施策
- 探索研究・TR・CMC・開発研究が早期から有機的につながった研究開発モデルの確立を目指す
- HB7（2025年竣工）やSanford工場（2027年竣工予定）と合わせて、協和キリンの創薬力をさらに高めていく

1. 東京リサーチパーク, 2. 富士リサーチパーク, 3. Chemistry, Manufacturing and Control

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

23

従業員や地域コミュニティをはじめとする主要なステークホルダーとの協議を経た上で、日本国内の現在の研究拠点を統合し、横浜の新たな最先端の研究センターへと移転する計画でございます。これは、現在と未来の両方を見据えた施策になります。最新の創薬技術や人材へのアクセスと活用を可能にするため、協和キリンの創薬プロセスを進化させる重要な一歩となります。

その結果、創薬研究、トランスレーショナルリサーチ、CMC および前臨床開発研究の機能が同一拠点に集約されることとなります。これらの機能が早期段階から有機的に連携する R&D モデルを構築してまいります。この新たな研究センターで見いだされた開発候補品は、Life-changing value の提供を目指し、臨床試験へと進んでいきます。

また、昨年完成しました高崎工場の HB7 棟および現在ノースカロライナ州サンフォードで建設中の工場は、治験薬の製造において重要な役割を担うことが期待されています。

このようにして、協和キリンは今後も創薬力全体を継続的に強化していきます。そして、協和キリンの最新の創薬技術を開発活動に取り入れてまいります。

それでは、R&D アップデートについて、CMO の鳥居よりご説明いたします。

開発パイプライン ニュースフロー

新規追加情報をオレンジで表記

KYOWA KIRIN

2026年5月7日現在

プロダクト	対象疾患	イベント	ステータス
ziftomenib KOMZIFTI™として上市済み	AML (1L併用)	KOMET-017 (P3)	進行中
		KOMET-007 (P1)	進行中
OTL-203	ムコ多糖症I型 (Hurler症候群)	ピボタル試験 (P3相当)	進行中
KK8398 infigratinib	軟骨無形成症	P3	進行中
	軟骨低形成症	P3	準備中
KHK4951 tivozanib 点眼	滲出型加齢黄斑変性	P2	進行中
	糖尿病黄斑浮腫	P2	進行中
OTL-201	ムコ多糖症IIIA型 (Sanfilippo症候群A型)	POC試験 (P1/2相当) 英国ILAPにおけるInnovation Passport指定を取得	進行中 2026年4月
KK4277	SLE, CLE	P1	進行中
KK2260	進行性又は転移性固形がん	P1	進行中
KK2269	進行性又は転移性固形がん	P1	進行中
KK2845	AML	P1	進行中
KK8123	XLH	P1	進行中
KK3910	本態性高血圧	P1	進行中
OTL-200 Libmeldy®/Lenmeldy®として上市済み	MLD	P3 (日本) 承認申請 (日本)	準備中 2026年3月
KK2223	CTCL, PTCL	P1	準備中

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

25

鳥居：では、R&D アップデートにつきまして、Chief Medical Officer に就任しました鳥居より説明させていただきます。

開発パイプラインのニュースフローにつきまして、前回の決算から本日までの新たなニュースとして、オレンジ色で示した箇所をご説明します。

まずは OTL-200 ですが、これは欧州で Libmeldy、米国では Lenmeldy として上市されており、現在日本におきましてはフェーズ 3 試験の準備を行っております。こちらは承認申請を本年 3 月に実施しております、現在審査が進められているという状況です。

次に OTL-201 につきましては、これはイギリスの革新的医薬品の開発およびアクセスを促進する制度である、Innovative Licensing and Access Pathway、ILAP と言っておりますけれども、この ILAP のもとで Innovation Passport の指定を取得しました。この指定によりまして、今後、開発を効率的かつスムーズに進められることを期待しているところです。

最後に KK2223、これは新たなパイプラインですが、こちらは CTCL、Cutaneous、皮膚の T 細胞リンパ腫と PTCL、末梢性の T 細胞リンパ腫を対象疾患としたフェーズ 1 試験を現在準備中です。

R&D のアップデートにつきましては以上です。

マリック*：ありがとうございます。

それでは最後に、私から閉会の言葉を申し上げたいと思います。

本日、私のリーダーシップのもと新経営チームが注力する重点領域についてご説明いたしました。われわれは明確な計画を持ち、世界中の人材を最大限に活かしながら人々を笑顔にするというパーパスの実現に向けて集中していきます。

皆様からのご質問を心よりお待ちしております。投資家の皆様をはじめ、皆様のお声に耳を傾けることが、私が目指すリーダーシップの根幹であります。

本日は以上になります。ご清聴ありがとうございます。

質疑応答

司会 [M]：それでは、これより質疑応答に移りたいと思います。

山口 [Q]：シティの山口です。ありがとうございます。よろしくお願いします。

一つ目が決算の中身で、Rocatinlimab のクロージングコスト、減損等々の話をいただきました。前にもそういったものをここで処理するという話は出ていたかと思います。額的に結構大きいのかなとも感じたんですけども、これはどのようなコストであるのか、あと減損が同じくどうやって発生しているのか。あと、これは今期で Rocatinlimab に関しては終わりということによろしいのか。もし内容が、もう少し詳細があれば教えてください。

五十嵐 [A]：まず第 1 点目ですが、臨床試験の中止を決定した 3 月時点では具体的な内容や規模について、十分にコミュニケーションできる情報はございませんでした。現時点でも大まかな見積もりによる推計値となっております。内容としては、やはり大規模な 3,300 人の患者様のフォローアップ、あとはデータ管理とか当局とのやり取り、CMC といった業務が今年いっぱい続く予定でございます。

2 点目の減損ですが、こちらは Rocatinlimab を日本向けに、供給責任が弊社はございましたので、そちらの準備をしていましたが、それが不要になったことで発生しました。

3 点目ですが、こちらのクロージングコストは 2026 年をもって終了と見込んでおります。つまり 2027 年には影響はないと考えております。

山口 [Q]：ありがとうございます。

もう 1 点、粗利のところですが。終わった期について、前期との比較においては、確かに前期は Q1 が粗利が高かったんですけども、通期の予想と比べてもミックスが良くなっているので、粗利が必ずしもよくないようにも、Q1 だけ見ると見れるんですけども、これはミックス以外に特殊要因はございますでしょうか。

五十嵐 [A]：確かにおっしゃるとおり、Q1、3 カ月で見ますと、前年 77%で今期 75%ですが、通期で見ますと昨年が 74%ですかね、今年が 75%ですので、多少ミックスの上下等あるものの、全体としては、ほぼ前年と変わらない予想となっております。

山口 [Q]：では、想定線ということですね。

五十嵐 [A]：はい。

山口 [M]：ありがとうございます。私からは以上です。

若尾 [Q]：JP モルガンの若尾です。お願いします。

一つ目が、私も Rocatinlimab の臨床試験の中止による影響を教えてくださいたいです。今の山口さんのご質問から察するに、ファーストクォーターでもクロージングのコストが発生していて、セカンドクォーター以降も発生していくことによって、ネットプロフィットでは従来計画並みであると考えてよいか。

2026年3月4日実施
「Rocatinlimabに関する臨床試験の中止について」より



業績への影響

- Rocatinlimab に関連する販管費および研究開発費が発生しなくなるため、短期的にはプラス影響
- 中長期的には利益にネガティブ影響となる

■ 予想されるコア営業利益に対する影響

- 2026年 : おおよそ +200~300億円
- 2027年 : おおよそ +300億円
- 2028年 : おおよそ +100億円
- 2029年以降 : 一定のマイナス影響を見込む

■ 予想される当期利益に対する影響

- コア営業利益に対する影響に加え、臨床試験の中止に伴い発生するクロージングコストについては、「その他の費用」として計上予定

■ 2026年度の業績予想への影響

- 現在精査中だが、2026年第1四半期決算発表のタイミングで業績予想の修正を開示予定

© Kyowa Kirin Co., Ltd.

28

あと、来期以降の影響も、中止の際の説明会でおっしゃっていただいている、28枚目のスライドで、来期は300億円、再来期100億円ですが、ここに関しては、来期以降に関しては単純に今期のR&D費用が二百何十億円か減っていますので、それをそのまま来期も持っていけばよろしいですか。

一方で、開発費自体は少し増えていく部分もあると思うので、ネットで考えた場合の来期のR&D費の考え方も教えておいていただけると助かります。

五十嵐 [A]：まず第1問目の質問ですが、クロージングコストは、Q1にはまだブックしておりません。プレゼン中もちらっと申し上げましたが、まだ大まかな推定値ですので、今後確認次第、恐らく早くもQ2、もしかしたらQ3でブックする形となると思います。

来期以降ですが、ご指摘のとおり、われわれは今までご説明差し上げたように、Appendix に含まれている 2027 年、2028 年における Rocatinlimab の終了の影響は、これで変わっておりません。ただし一方で、これから 3 年間の予算をまた夏にかけて組み直しますので、協和キリン全体としての数字はもちろん今後予算を組んで、しかるべきときにお伝えしたいと考えております。

若尾 [Q]：分かりました。R&D は増えていく方向で見ておいてよろしいですね。

五十嵐 [M]：今年からということですね。今年と比べて。

宮本 [A]：今、五十嵐さんがご説明したとおりで、来年以降の予算は、作るところをこれから始めるところですので、まだ確定的なことは言えないということになります。

当然、これまで予想していた Rocatinlimab の分はなくなりますので、そこは来期以降なくなっていくかもしれませんが、現状走っているプロダクトの R&D コストはこれから増えてくるものもありますので、その変化を考慮しながら作っていくことになると思います。

若尾 [Q]：分かりました。ありがとうございます。すみません、長くなって。

二つ目として、Crysvita のファーストクォーターの進捗について教えていただきたいです。全体としては欧州も好調で、計画どおりなのかなという印象でした。一方で、米国だけ切り出しますと、この在庫の影響もあって、Q1 としては昨年であったり、一昨年と比べても低いので、US は御社の計画を下回っていると見たほうがよろしいですか。

マリック [A]*：われわれの売上というのは、協和キリンからスペシャリティファーマへの売上となります。われわれはこのレポートの中で入れていないのは、真の需要というところなんですね。実際、患者様、それからヘルスケアプロバイダのところに行くバイアルはこの中には入っていません。

右下のチャートを見ていただきますと、ミリグラムベースのデマンドのトレンドを見て取れます。これを見ると物理的なデマンドが見て取れます。スペシャリティファーマシーから医療機関、つまりは患者様へのデマンドが見れます。これを見ていただきますと、需要自体は安定して増加しています。第 1 四半期、天候がアメリカ全土にわたってかなり厳しかったわけです。つまり患者様への投与が難しかったわけです。しかしながら、それでも成長は続いております。

もう一つ重要なのが、われわれは入念にリーディングインディケーター、先行指標をトラッキングしております。これは XLH の患者様、同定された患者様の数であります。それから開始フォームの数を見ております。ドクターが Crysvita を処方したいと考えている患者様に対してサインをする数であります。

そして、保険償還もきちっと担保されております。これらの先行指標を見てもとポジティブでございまして、われわれのプランどおりです。

ということで、われわれの期待値はプランどおりで、何も変更はございません。

若尾 [M]：分かりました。ファーストクォーターは何かずれたのがあったのかもしれませんがけれども、一応通期で見ればインラインで US も推移していると理解しました。ありがとうございます。以上です。

関 [Q]：UBS の関です。ご説明ありがとうございました。

今の若尾さんのご質問のフォローアップですけれども、卸のチャネルインベントリーの日数はもう 3 月末時点で正常化していて、さらなるインベントリーの取り崩しというか、それはもう起こらないと見ておいてよろしいでしょうか。

マリック [A]*：はい。在庫レベルに関しては非常に注意深く測定しておりまして、在庫水準に関しては正常に近いレベルにまで下がってきております。従って、需要と売上がこれからはもう少しマッチングしていきたくらうということが考えられます。

関 [Q]：15 日とか 20 日ぐらいでしょうか。

マリック [A]*：その情報は開示しておりません。というのは、スペシャリティファーマシーの状況によって違うからです。

関 [Q]：ありがとうございます。

2 点目が、少しストラテジックなところでお伺いしたいです。メディアの記事で、3 年で 7,000 億円ほどの投資枠といいますか、投資可能というコメントがあったかと思えます。ちょっと驚きというか、金額のサイズとしては大きいなと感じております。というのも、Crysvita のドーピング特許が 2035 年までであるので、そんなに後期のレートステージのパイプラインを急いで導入しなくても、早期のパイプラインでいいのかなとも思っていたんですけれども、この辺りの考え方をもう一度いただいてもよろしいでしょうか。

マリック [A]*：想定なさっていることは非常に正しくて、インタビューの中で私が受けた質問というのは「最大の」金額でございます。どれくらいまで検討することができるのかという最大の金額をお話しいたしました。しかしながら、それを実際に使うということでは必ずしもありません。注意深くさまざまなアセットに関して、現在、注力領域で検討しておりまして、どれをやれば最も大きな Life-changing value が出せるかということを考えています。

従って、この数字というのが、あくまで本当に最大限に可能ではあるけれども、必ずしもターゲットするレベルではないということをご理解いただければと思います。

関 [Q]：ありがとうございます。そうすると、早期のパイプライン、小さなところからと考えておいてよろしいですか。

マリック [A]*：はい。現在、われわれは注意深く、ポートフォリオの戦略に関して目を向けておりました。どうやったらパイプラインを補強、強化できるかを考えています。ということで、さまざまなステージについて検討しており、さまざまなモダリティに関しても検討しております。注力領域においてであります。従って、レートステージのアセットのみではないということです。

ご承知のとおり、レートステージのアセットは、バリュエーションが非常に高くなっております。従って、なかなかリターンが出にくいということがあります。より管理しやすいアセットということを戦略で考えていきたいと思っております。

村岡 [Q]：ありがとうございます。モルガン・スタンレー、村岡です。

一つ目はKOMZIFTIです。最初のクォーターが2ミリオンドルで、今回、売上ゼロになってるんですが、これはもうちょっと数字があるのかなと思ったんですが、今後のセカンドクォーター、サードクォーター以降の売上がどの辺りから実質出てくるのか、そして今何を進めていらっしゃるのか、認知度向上のために等々、もう少し数字を伴った感じで、KOMZIFTIの、ファーストラインの話じゃなく、今いまの考え方、マーケティングのことを教えてください。

マリック [A]*：五十嵐から売上の話を、私からマーケティングの話をしたと思います。

まずKOMZIFTIのアップテイクですけれども、これはわれわれのもともとの期待どおり、ないしは期待を上回っております。多くのアナリストさんがKOMZIFTIをRevuforjと比較されるんですね。ただ、ここは直接比較をするのが難しいです。RevuforjはKMT2Aのリアレンジメントの適応症を取っております。他に治療選択肢はない部分です。ただ、われわれはNPM1 ミューテーション適応症を取っております。ここには既存の治療選択肢があります。

ですから、オンコロジーの領域において、協和キリンはかなり強力なフィールド活動を行っております。そして、ブランドプロフィールの認知を高めるべく活動しております。その結果、いくつかの保険プランで、KOMZIFTIにプリファードアクセスを付与していただいております。使いやすさと安全性プロフィールが評価されてのことです。これをもって、このモメンタムは今後の四半期も続くと考えております。

それでは、五十嵐から売上のタイミングについてコメントをお願いします。

五十嵐 [A]：ちょっと分かりにくいんですが、売上は、今期は出ております。予算よりも実は上回っている形で強いんですが。

ネットプロフィットですね、要は製品全体のネットプロフィットが、まだ益が出ていない状態がQ1ですが、こういった際には OPEX として、協和キリンとしては、弊社としては計上していますと。ネットプロフィットが、益が出る段階になりましたら、また会計上のブックの仕方が変わるんですが、Q1 に関してはネットの損益の半分が OPEX として計上しているという形になっております。

村岡 [Q]：ありがとうございます。すみません、私も補足資料 5 ページ目のこのチャートを少し見間違えていたかもしれないです。脚注の 1 に売上ゼロじゃなくて、売上は Kura の決算後に開示予定と書いていましたよね。すみませんでした。つまり、前のクォーターの 2 ミリオンダラーよりも売上が伸びているということによろしいんですね。

五十嵐 [A]：はい。そのお考えで大丈夫です。

村岡 [Q]：分かりました。ありがとうございます。

もう一つの質問ですが、これも五十嵐さんに質問です。五十嵐さん、武田からやってこられて、まだ時間は少ないとは思いますが、武田といえばコストカットが上手な会社という印象があるんですが、協和キリンに入ってきてこられて、見えてきたコスト面での協和キリンの改善点はどんなものがあるのか。まだ早すぎるのは百も承知ですが、見えてきているものをいくつか教えていただけると大変参考になります。

五十嵐 [A]：ありがとうございます。

同じ製薬業界ということで共通するところもありますが、やはり日々の会議の仕方とか、いろいろなそういうものは違うところがあります。ご質問に関しては、まだ入社 1 カ月ちょっとですので、次回か、年の後半にお答えできるかなと思います。すみません。

村岡 [M]：分かりました。次回以降、何かアップデートいただけると大変助かります。

五十嵐 [A]：ただ、アブドゥルさんからも説明がございました、新しい執行体制における優先事項ですかね、プレゼン資料であったところで、丸の 4 番、一番下のところがあるんですが、こちらのオペレーショナルエクセレンスに関しては、今、鋭意議論中というか、レビュー中です。要は、どうやって効率性を高められるか、プロセスを見たり、ガバナンスをいかにアジャイルにできるかとか、そういった点を今後見ていきたいと思っております。

マリック [A]*：アブドゥルです。

財務的な KPI に関しては、二つの意味で達成しています。まず一つは売上の成長、これは有機的な、非有機的な成長という両方の意味です。それから、コストベース、効率性の管理です。この二つに関しては、われわれの結果を出すのに大変重要なポイントだと考えています。

村岡 [M]：ありがとうございます。以上です。

植田 [Q]：ゴールドマン・サックス証券の植田でございます。

私から一つ目、先ほどいくつかご質問があった原価率のところについて追加で教えていただきたいです。先ほどご説明の中では、例年どおりの進捗率というところで、計画に沿った進捗というご説明がありましたけれども、今期は Rocatinlimab のアップフロントの繰延収益が大きく計上されているというところを考えると、本来であれば進捗率が例年よりも高めでもよいのかなとも思いますし、昨年度、粗利率が非常に良かったということも踏まえても、技術収入を除いたベースの原価率が高いようにも思われますので、何かこのほか、例えば生産計画の変更に伴う原価差額の話とか、為替の棚卸資産の未実現利益の影響とか、何か特殊な要因等ほかになかったのかどうかについてご解説いただけますでしょうか。

五十嵐 [A]：ありがとうございます。

こちらは、今期に特殊要因があるというよりは、去年の Q1 に特殊要因、例えばライトオフとか、そこら辺の要因がなくて結構高かったんですね。ただ、去年の Q2 とか、後半に、通常のレベルですが、そこら辺の期限切れのものとか、ライトオフが発生しまして標準化したと。

ですので、どちらかという、今期に大きなマイナス要因があったというよりは、前期の Q1 にマイナス要因が Q1 は少なかったと。なので、どちらかという、年のうちのフェージング的な要素が影響しています。

植田 [Q]：ありがとうございます。この計画の修正のところで書いていただいている生産計画の変更に伴う原価差額というのは、1 クォーターは影響していないという理解でよいですか。

五十嵐 [A]：ごめんなさい。こちらはしています。そこを言及するべきでした。詳細は割愛させていただきたいと思うんですが、おっしゃるとおり、生産計画の変更による影響で、原価差額として一部取り込んでおります。

植田 [Q]：ありがとうございます。これは 1 クォーターだけではなく、この 30 億円という部分とかはどういった形で計上されていく予定ですか。

五十嵐 [A]：こちらに関しましては、1 クォーターだけになります。

植田 [Q]：ありがとうございます。そういう意味では、30 億円ぐらい、結構大きめに一つ、第 1 四半期の原価率が悪化する要因にはなっていたということですね。

五十嵐 [A]：そうですね。

植田 [Q]：ありがとうございます。

2 点目が、今後の販管費、研究開発費の見通しの考え方を教えていただきたいです。本日修正いただいた計画も拝見すると、販管費は大体第 1 四半期の水準が続いていて、研究開発費は Rocatinlimab の部分が減ってくるので、四半期で 220 億～230 億円ぐらいが続いていってというような形で考えてよいのかというところで、先ほど、来期以降のところについても研究開発費については少しご言及がございましたけれども、大体、第 2 四半期以降といいますか、年間で 900 億円前後をベースに、ここから増えるのか減るのかというようなところをわれわれとしては考えておけばよいのかをご確認いただけますでしょうか。

五十嵐 [A]：まず今期に関して言いますと、Q1 の研究開発費は、Rocatinlimab の研究開発費がまだある状態でした。ただ、Rocatinlimab の研究開発自体が過去に比べてピークアウトしていましたので、多少減少しています。おっしゃるとおり、Q2 以降は Rocatinlimab の研究開発費がなくなりますので、全体として減少する傾向になっております。そちらが今期の予想に組み込まれています。950 億円ですね。

来期以降については、先ほど申し上げましたように、今後、予算組みを経て、しかるべきときにお伝えしたいと考えております。

植田 [M]：承知いたしました。ありがとうございます。私からは以上でございます。

橋口 [Q]：橋口です。よろしくお願いします。

研究拠点の統合のご計画による財務諸表への影響について教えていただければと思います。プレスリリースも拝見しましたが、まだスケジュールが決まっていないということですが、現時点でどれぐらいのタイミングを考えていらっしゃるのか。新しい拠点は賃貸物件のようですので、大きな設備投資は発生しないという理解でいいのか。

一方で、新しい拠点に移ったあと、ヘッドカウントが現状と比べてどう変化するというのを考えていらっしゃるのか。それに伴って、研究開発費、ランニングでかかる部分のプラスマイナスは今と比べてどうなりそうか。あと、閉鎖を検討されることになっている町田や三島の今の拠点で、減損あるいは不動産の売却益のようなものが発生する可能性があるのかについて、今、可能な限りでコメントいただければと思います。

五十嵐 [A]：私から簡単にまず説明差し上げて、あとでどなたかフォローアップの意見があればぜひお伝えください。

現時点、研究拠点統合に関して、長期的なコスト面での細かい試算は、内部的にあるんですが、まだ試算の程度で、まだ公表するようにはなっていません。ただ、プロセスの効率化等々は考えております。

鳥居 [A]：今、五十嵐からあったように、まだシミュレーション段階で、また今後いろいろ数値は変わるとは思います。ただ、マイナスになることはないかなと思います。

その要因の一つとしては、富士の事業所ですね。ここはかなり建物も古くて、いろいろな維持費とか、ユーティリティの費用とか、結構ランニングコストがかかっていると。この部分が新しい拠点に集約することによって、利益上はプラスになるというところが大きいかなと思います。

あとは、おっしゃるとおり、FRP、TRP はそれぞれ売却することになると思いますので、先ほどアブドゥルから 2029 年の後半から 2030 年前半に稼働ということですがけれども、その前後とか、後ろ辺りで、どういう形でいくらで売却できるか、ここもいろいろ幅がありますけれども、そういった変化が 2030 年前後には予定していると。

現状申し上げられるのは、ちょっとラフになって申し訳ないんですけども、以上です。

橋口 [Q]：ありがとうございます。ヘッドカウントの増減については現状どようにお考えですか。この研究拠点で業務に携わっていらっしゃる方の数についてはいかがでしょうか。

鳥居 [A]：基本的には規模感としては変わらないです。ただ、リサーチのところの FRP と TRP を集約するのではなくて、先ほどアブドゥルからもあったように、CMC の、特に初期のアクティビティのところもこの拠点に集約しようということになりますので、単純比較はなかなか難しいところかと思いますが、計画をお話しできるようになった段階では、またシェアしたいと思います。

橋口 [M]：ありがとうございます。以上です。

和田 [Q]：SMBC 日興証券、和田です。ありがとうございます。開発パイプラインのところ、私は 2 点伺いできればと思っています。

一つ目が、Tivozanib のフェーズ 2 の結果が夏から秋ごろに出てくると思うんですけども、これは基本的には導出を考えられているということですが、導出の交渉はフェーズ 2 の結果が出てからと考えていいでしょうか。

鳥居 [A]：おっしゃったように、これは今年 10 月の学会で、すみません。

宮本 [A]：すみません。混乱しました。宮本からお答えしますね。

おっしゃったとおりで、パートナーリングアセットと、われわれも堂々と公表していますので、いろいろなお声掛けも当然ありますし、そういった意味での交渉は既にやっていると言えばやっているということですが、

ただ、皆さん、フェーズ 2 をやっていますよね、ですので、データを見たくなるのは当然だと思いますので、本格的な話は恐らくフェーズ 2 のデータをお見せできるようになってからかなとは思いますが、この辺、BD の世界なので、もっときちんとお話しできる時になったらお話しできるということだと思います。

和田 [Q]：分かりました。ありがとうございます。

2 点目です。表示いただいている 4277 の状況をお伺いできればと思っています。3 月末にマイルストーン達成のニュースも出ているんですけども、これのフェーズ 2 にいくのかどうかみたいなどころの見立てもお伺いできればと思うんですが、いかがでしょうか。

鳥居 [A]：今、フェーズ 1 のデータを見て、今後のアクションについて、今まさに社内でも検討している状況ですので、また開示できるタイミングで情報はシェアしたいと思います。

和田 [Q]：学会発表とかは計画されていますでしょうか。

鳥居 [A]：検討中で、明確な予定はできていない状況です。

和田 [M]：承知しました。ありがとうございます。以上です。

主要開発パイプライン (2)

	開発中の疾患 ^{*1}	開発ステータス	モダリティ、使用技術
KK4277	全身性エリテマトーデス 皮膚エリテマトーデス	P1 (日本・アジア)	抗体、POTELLIGENT®
KK2260	進行性又は転移性固形がん	P1 (日：進行中、米：準備中)	抗体、REGULGENT™
KK2269	進行性又は転移性固形がん	P1 (日・米)	抗体、REGULGENT™
KK2845	急性骨髄性白血病 (AML)	P1 (日本)	抗体薬物複合体 (ADC)
KK8123	XLH	P1 (米・欧)	抗体
KK3910	本態性高血圧	P1 (日本)	抗体
KK2223	CTCL, PTCL	P1 (米・欧)	Targeted Therapy

*1 本資料の発表時点で開発中の疾患であり、最終的に規制当局から承認される適応症とは異なる可能性があります。
© Kyowa Kirin Co., Ltd.

35

山口 [Q]：シティの山口です。一つだけ追加です。

KK2223 ですか、新しく入れたやつですが、Targeted Therapy と書いてあって、僕の拙い検索では引っ掛かってこないんですが、これは抗体ではなさそうで、注射剤ですけども、モダリティ的なものがあればご紹介いただけますか。

鳥居 [A]：鳥居です。

現時点では非開示とさせていただきたいと思います。申し訳ございません。

山口 [M]：ありがとうございます。以上です。

豆ヶ野 [Q]：BofA 証券の豆ヶ野でございます。よろしく申し上げます。私から 1 点だけ確認させていただきたいです。

中計というか、3 年間のキャピタルアロケーションの方針を以前出されていたかなと思うんですけども、R&D 投資で 3,800 億円ということで、来期以降のお話はまだできないというのは重々承知ですけども、Rocatinlimab がなくなって、御社としてこれからこういったところにお金を使っていくのか。戦略投資のところなのか、自社の R&D のところなのか。そういったところのカラーがあれば教えていただければと思います。よろしく申し上げます。

五十嵐 [A]：豆ヶ野さん、ありがとうございます。

おっしゃるとおり、今後数カ月かけて3年間の予算を作りますので、そういった意味ではキャピタルアロケーションは、まだ To be updated と考えていただければと思います。

質問の後半は、先ほどアブドゥルからも申し上げましたとおり、まず手元のパイプラインをしっかりと伸ばしていく、研究開発していくこととともに、外部のBDを含めて、もし良い案件があればそちらの投資も両方考えているということです。

豆ヶ野 [M]：分かりました。ありがとうございます。

若尾 [Q]：確認含めて教えていただきたいんですけども、結局 4951 のフェーズ 2 のデータは10月の学会で発表されるんですか。ここが途中で切れちゃって分からなかったんですが。

鳥居 [A]：そこも含めて検討中ですので、まだ確定したわけではございません。

若尾 [Q]：分かりました。ありがとうございます。

もう1個だけ、この 2845 ですが、これは 2026 年中に何かしらのデータが出てくると考えていてよろしいですか。先日、Rocatinlimab の開発中止の際も、この 2845 はハイライトされていて、早めにデータを取得したいとおっしゃっていたと思うので、教えていただけませんかでしょうか。

鳥居 [A]：鳥居です。

データ開示のタイミングに関しては未定という状況です。申し訳ございません。

若尾 [M]：分かりました。ありがとうございます。以上です。

司会 [M]：それでは、こちらをもちまして、2026 年 12 月期第 1 四半期決算におけるオンライン説明会を終了いたします。

本日のオンライン会議の音声は、弊社 IR Web サイトにてオンデマンド配信を予定しております。また、質疑応答セッションも含むトランスクリプトもご用意いたしますので、内容のご確認にご利用ください。

本日はご参加いただきまして、誠にありがとうございました。今後とも、協和キリンをよろしくお願いたします。

以上